



古史通

筑後守新井白石先生著
全五冊

伊5
672
81





伊門
號 672
卷 14

史通讀法凡例

讀法

本朝上古の事を記し書を記すは其義を語
求りて其記す所の文字を拘るるは上古の代
今の文字といふをいふは先世よりして言嗣き語
嗣き一事を後世の人とす言嗣き語嗣きのみ
人皇第十六代のみは應神天皇十五年は秋百濟
王の貢使阿直岐といひありて此人銚典を讀む
事を能くしるは菟道稚郎子といひて我
國よりして今の文字を傳習するの始とす其代
小記ろく行ふといふは第十の履中天皇四年の
秋始て諸国に國史を委き言事を記して四方の志を



達しぬりし我が国に今字の行はる事始と云ふ
第三十四代推古天皇廿八年に春上宮太子蘇我馬子
宿禰太子勅を奉らぬく事古記を脩りて先代旧
事本紀を撰る其代古記のりもの元履中天皇
始て国史を撰也言事を記さし先づいふ後
彼先世より言嗣き語嗣きしを今字を用い
てさしとて記さるる事されし其今字を用い
て毛多とて今俗の假字といふそのを用ゆる事
漢字乃ち多音を假りて我俗の語言を記し
本紀に上宮記之假名いすて旧事本紀の前あり
假名といふ此書の前ありと云ふ事なり
此也上宮太子旧事本紀を撰る時よきて

漢土の人其梵語を譯して毛多の漢字を用ひ
て其字義を假りて其字音よりいふされし
文字を讀むに其字音よりいふ我が国の語言
よりいふ我國の韻詞のよき事多調句律相通
せしとて我が國の梵土の陀羅尼の漢語を以て譯
すといふ漢音を假りて其梵音をうつし
て其字義を假りて其字音を假りて其字義を假り
上宮太子稱して聖人とて其聖人の事盡
る能くいふ事ありとて其字を用ひし事あり
其義相合しとて其字を用ひし其後第四十三代
元明天皇和銅五年の春太朝臣安麻呂勅を奉りて

撰録せし古事紀小旧事紀小用いらしむ所の文を
 改免志むる也。多くして其序より敷文構句於
 字即難已因刻述者詞不盡心全以音連者事趣更
 長と志むる也。此假用ゆる所字ありてこの正
 實と遠いく彼虚偽を加む事を恐るる所なり
 るを以て凡上古事を記せしものをんる所なり
 下の文字小拘らざるしてそを語言の間小求むとい
 中す也。正實と遠いく虚偽を加ふる所なり。第四代天武天皇の内時
 諸家傳りし所の帝紀本群既に正實と遠いく多く虚偽
 を加ふる所を憂へりてその所を古事紀の序より詳し
 う由を推し考ふる所なり。古事紀の序より詳し異端
 荒謬の説を招致せしむる所なり。伊弉諾尊とある所
 伊弉諾尊とある所なり。伊弉諾尊とある所なり。伊弉
 語の唖呼盧の語に依りて大日靈貴とある所なり。伊弉
 日如来等の説ありて海神とある所なり。伊弉諾女
 伊弉諾女ありて伊弉諾女ありて伊弉諾女ありて伊弉
 伊弉諾女ありて伊弉諾女ありて伊弉諾女ありて伊弉

古事紀序小全以音連者事趣長と云る凡今字假り
 用ゆる所俗ふ所所の名假名を用ゆる法のことなる
 所その字の多くなりてその句の長きのみ小あらん所
 假名を用ゆる法あることなる也。我
 国の方言小日を呼いし以て少く假名を用ゆる法小
 ありて今字の音を假りて以て字を用ひん小我々の
 方より小以てふ所の多し。これのものを作らんとす
 事。其字を假りて用ゆる所なり。今字を假りて用ゆる所
 其餘字音小ありてふ所なり。日火氷樞後刀難尋亦の語皆同
 非非の語ありてふ所なり。其字を假りて用ゆる所
 字を毛日難く其字を假りて用ゆる所なり。我々の
 所の字小此の音何のよありん多し。其字を假りて用ゆる
 所なり。即此也。其字を假りて用ゆる所なり。我々の

皇朝の書に天地初まると天皇氏あり十三代次小地皇
氏あり十一代次小地皇氏あり九頭と云々を云々
一人の身より或は十之代或は十一之代或は九之代あり也
此の流ありを云々を云々太古の俗朴質ありて
人を好むる鳥獸の言なく其言を以て好むる
十三代といふ天皇氏十三世也十一頭といふ地皇氏十
世に九代といふ人皇氏兄弟九人又女媧氏后を鍊て
て天を浦りといふ后を敲きて火を夜く昏黒り
夜を過して天の及ぶ前を浦りて是後世も膏
を焚祀恩の終りの始り又義和日を生るといふ甲乙
丙丁戊己庚辛壬癸の十日といふ初め始り常義
月を生るといふ三十日を積り一月と成り十二月を

積り一年とすといふ初めは此後世唐
日乃始りまると云々人語銅鉄の類ありて
いふ毛元後世金華の事始り皆是太古の俗朴
質の言ふ出たりて此等の類讀者諱を以て
言を害ひるものありといふは余国上古
の事也古を云々翻り語翻りて又かゝの事と云
を以て言を害ひるものありといふは其書を讀む事の
要なり也すといふもの也

凡天下の言小い古言あり今言あり其古今の間にあり
又その方言あり其方言の中か又そのく雅言あり俗言
あり其の雑なり其の事也古言といふ太古より遠古あり
また其のく其世の人の心あり其の語を以て今言といふ世

二世のて減りて天と始るる横目之民望て視
すともふもの形其天なるれ所以ふ至て聖も又知や
すかふんこれ事神うんを秘りてを
あつた承国乃皇統のて地と古く悠久ふ知りて
と又神うん秘する事かより終るるさあらん
四十四代のみく元正天皇養老四年の夏日本書紀撰
述成りて奏上ありて旧事紀古事紀亦の書廢
りて其後五十一代のみく平城天皇大同二年よ
りて忌部廣成古語拾遺を撰進す世の人又これを
爾う其存日本紀奏上ありて勅して始て其
書を講せしむるに歷代の天子儒臣勅して
其書を誨導しむるに世儒専門の

学と有りて左氏公羊氏穀梁氏鄒氏邾氏其
書を傳ふる中鄒邾二氏の傳は左公穀
之氏乃傳ち世の学者其学を受傳て其説と
之のく何からんか其傳のものは並小孔子
春秋の学ふありて凡孔子の春秋を学ん
者の其筆削意ふかた能はるるありて能は
るる傳ありて論じたりて家傳ふ
所の説孔子筆削之を論じたりて其師説
多ふありてんり物なりし彼傳ありて我
傳ありてんりも長し我をすて彼に従ひ
たりて其師説ありてんり

孔子筆削の事ふかぬしゆるらんを稱
して孔子春秋之學といふらんを稱
國史を考ふるも又此事に似たるあり旧事紀事
紀日本紀等の書ハ皆これ朝廷の勅有り像りて家
上古神代より始て歷代君臣の事業行記載せり
可しすれども其書ハ不レ公をりて重訂あり
孔子春秋の書を傳ふるもの其説ハ異因あり
ことハ一するに専ら日本書紀の説より志す
事紀古事記の書を廢せん志すこと
の書ハ少く其書實に遠く其理
ふかぬし長しとんゆ流ふ志す
ことハ其餘諸家の書ハ凡そ流す

延の正史實錄等ハ出さるるの徴
旧事本紀の書蘇我大臣の序を執る
いよいよ竟るに盡るに探録
其
解レ更レ後勅を依りて探録す
書を閱するに重複措礼その撰定
初是未成し書とんゆかの神奇
其好むるに餘りて老子入ら
徒其説を附余るも其由来
其筆跡起る男兒女弟夫婦偶
筆を絶つ子姪姨母父子鹿を
にわぬ何の教に誡戒ふかぬる

書秘籍と云ふものも既か多しと云ふを旧事本紀
古了紀日本書紀亦多考し其微と云ふも
る紀一切小採用の事云は古よふ而の無辞異端
徒た篇籍を撰り也

一凡此書を氣替くしてつゝ條暢をうんそ事物て
いさし明辨をうんすして大方の誤を貽ひお是を度
主の或をよぬ難わんい割り或向を作して擬對すよ
蔓説を挿サレガシ江のり時端多く文長く叙る不便す
る也

正徳六年丙申三月上澣

筑後守從五位下源朝臣君美題

嘉永七年五月八日詠

况齋同考

